

東中欧近現代史

～子どもと家族の視点から～

江口 布由子

子ども史

ナショナリズム

世界大戦

研究室の所在：ソーシャルデザイン工学科棟4F西

・なぜこの研究をしているの？

出発点は民族紛争や人種差別への関心でした。それらを「悪」として蓋をするのではなく、なぜ、どのような形で生じ、そして変化していくのかを知りたくて歴史研究に入りました。

・具体的に今やっているのはどんなこと？

○子どもや女性に焦点をさだめて歴史を描く

「歴史に残る」ような偉人や政治家ではなく、ごくわずかな痕跡しかのこっていない、子どもや女性に焦点をさだめて近現代史を描くことをテーマとしています。とくに、捨て子や里子、難民の子ども、あるいは国際養子縁組で海を渡った子どもといった、「周縁的」な子どもたちへの扱いや、その経験に注目しています。

○近現代のナショナリズムと多文化・多言語状況の関係

近現代は「国民（ネイション）」という同質的な政治集団が、突出して重要な意味を持つようになった時代です。日本だと、それは明治以降のことです。これ以降、人びとは国民という意識を強く持つようになり、果ては、国民のために国民として命を差し出すことも求められます。この歴史的な動きのおおもとの思想や政治運動をナショナリズム（国民主義）と言います。これが、私の関心の中心です。一方、東欧という地域は、宗教的にも言語的にも文化的にもきわめて多様な地域でした。果たして、ナショナリズムとこの状況はどのように絡み合ったのか、ナショナリズムは本当に浸透したのか、といったことを明らかにしたいと考えています。

・研究成果はどのようなモノやコトに役立つの？

歴史学は変化を見出す学問です。歴史には、今の人からみれば「え?!」ということがたくさんあります。人類社会は変化し続けてきたのです。歴史学を通して「世界はよりよいものに変えられる」という希望を持つ助けになったらいいなと思って、研究をしています。